

3.9 熟達度のレベルと達成度の成績

1、熟達度のレベルの定義と特定のレベルにおける目標達成度の評価の間に尺度に関する区別がある。

1.1 熟達度の尺度について

熟達度の尺度は熟達度の上昇度を定義する(図1参照)

①全概念領域をカバーする場合

②関する分野や制度に応じた熟達度の領域を押さえる場合

⇒CEFR の考え方と一致している。

熟達度のレベルと達成度の成績の尺度の区別の一例として、現時点は同じ B2 でも、2ヶ月前に B1 と評価された人と2年前にもう B2 と評価された人の達成度は違う。

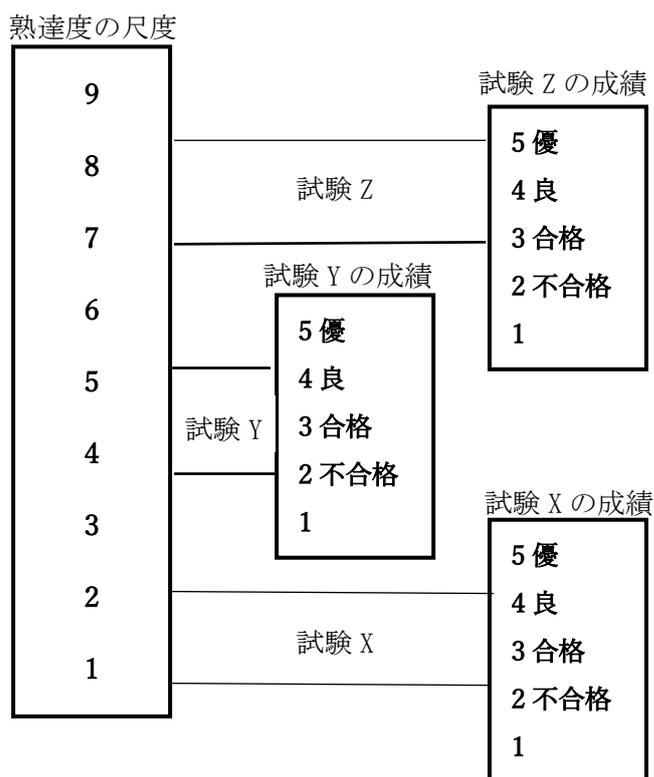


図1

目標をどこかにレベルを設定するでしょう。(図1参照)

試験 Y は熟達度尺度で4と5の等級をカバーしている。別のレベルを対象にした試験 X、Z 等もある。

1.2 達成度の成績の尺度について

試験 Y の達成度に成績をつければ、1～5 の間で 3 が合格ラインを表している。このような成績の尺度は「話す」や「書く」の試験のような、主観的に点数をつけて出来具合を直接評価する場合にも用いられるし、テスト結果を知らせるのにも使われる。試験 Y は一続きの試験 X、Y、Z の一部かもしれない。どの試験でも類似なスタイルを持つかもしれない。ただ、熟達度の観点から言えば、X での 4 と Y での 4 は同じ評価ではない。

2、試験間の成績の関係はどうすれば確立可能か

共通の熟達尺度に置かれるのならば、可能であろう。

↓

方法：専門知識の蓄積、項目の分析、公開された試験問題・回答例の比較、試験の受験者の成績の等級評価

↓

上記の方法の実施者は試験の基準を解釈できる訓練された評価者の集団である。

↓

アウトプットとして、共通の基準を明示的で明確なものにし、基準を客観的に扱えるように実例を与え、尺度化する必要がある。

↓

難しい点

①様々な成績の意味は当該の環境にあつて教師に内化されており、定義されていることはほとんどない。

②理論上、教師の成績評価と熟達度レベルとの関係は、試験の実績と熟達度レベルとの関係と基本的に同じであるが、極めて多面的な基準が存在するので、さらに複雑になる。

(理由：教師間の評価差、地域ごとの教育制度の差、学校の差、学年の差など)

↓

上記の点を克服ために、技術的累積が必要である。つまり、同じ目標に対する様々な達成度の基準定義を示さなければならない。(具体的に言うと、教師は平均的な達成度を表 1、2 のような既存の達成度尺度に置き換えることを求められるかもしれない。代表的な運用例を集めて、連続した尺度に当てて測定することができる。または教師はすでに標準化された言語運用例のビデオを、普段の生徒に対して使っている成績で評価してみることも要求されるかもしれない。⇒評価した分と評価する分のそれぞれの対応)